

市営ばんえい競馬が発足

法に基づく競馬としてスタートを切ったばんえい。昭和二十八年には、旭川、帯広、北見、岩見沢の四市で市営ばんえい競馬が発足します。

馬産地の使命と情熱を懸けて 公営ばんえい競馬開催へ

産声は上げたものの、意外にも結果が伴わなかったばんえい競馬。翌昭和二十三年には早くも休催を余儀なくされました。この年、改正競馬法の発足により、地方競馬は都道府県主催となりましたが、当時は全国的に競馬不振の時代。普通の競馬(平地競馬)を開催するだけで手いっぱいだった北海道は、赤字必至とみて、ばんえいの開催に二の足を踏んでいたのです。

この時、ばんえいの開催に向けて熱心に働きかけたのは、旭川・帯広両市の鞍馬組合でした。「赤字は出さない。赤字にならない予算でやればいい。実務も地元で引き受ける」という意気込みで、開催促進運動を展開。道営ばんえい競馬は、こうした人々の熱意と馬産地としての使命に支えられて

立ち上がったものでした。

こうして昭和二十四年、道営競馬(現・ホッカイドウ競馬)初のばんえい競馬が、旭川と帯広で各二日間に渡り開かれました。経費をぎりぎりまで削減して開催した甲斐あって、結果は黒字。特に旭川では、同じ年の平地競馬で一日の平均売り上げが一六万円だったのに対し、ばんえいでは一日平均二二〇万円という記録的な売り上げを達成。ばんえいの将来に、一筋の光が差した瞬間でした。

その後の競馬法改正によって、地方競馬場を持つ市町村でも競馬を開催できるようになると、昭和二十八年、旭川、帯広、北見、岩見沢の四つの市営競馬が発足。これから道と市が主催するばんえい競馬が始まりました。

手探りで邁進した草創期

初期の頃はすべてが手探りでし

た。法に則った競馬として成り立つのか、関係者たちも半信半疑のまま、無我夢中で開催に取り組んでいたそうです。

ヨーロッパ生まれの伝統ある平地競馬とは違い、ばんえいのルーツは農村のお祭りばん馬。決まりごとといえば、その最後尾が入った時点でゴールとする、というくらいのも。これは、荷物を目的の地まで運び込むことが使役馬の役目だったためですが、当時の農林省からは、そんなおかしなルールを条例に盛り込むわけにはいかない、と難色を示されたという経

緯も。細かいルールを一から作らなければならず、それを開催前に騎手に伝えるという慌ただしさでした。

騎手にしても、農業、運送業、造材業など、本業の傍らに草ばん馬で腕をならしていた兼業騎手ばかり。レース当日に彼らが連れてくる馬も、日頃仕事をともにしている農耕馬や荷役馬でした。初期の頃、出場する馬がなかなか集まらなかった岩見沢や北見では、関係者が畑で作業中の馬をスカウトしてかき集めたという逸話も残っています。

現在のように騎手が専業になるのは、昭和四十年代以降。それ以前は、騎手の多くは馬主でもあり、賞金をもらうより、自慢の愛馬が賞状やメダルを獲得することの方が誇りだったようです。レースが終わると人馬ともに再び畑や山に戻り、労働で馬を鍛えて次のレースに備えていました。「産業と結びつく競馬は、ばんえいにおいてほかにない」と言われたのも道理でした。

当初は、道営・市営ともに平地競馬とばんえい競馬の両方が行われていましたが、多額の経費を

必要とする平地競馬の開催は次第に敬遠されるようになり、昭和三十七年から市営はばんえい競馬一本に。昭和四十一年には、道は平地のみ、市はばんえいのみを開催する二分運営方式が確立。このばんえい単独開催こそが効をなし、四市による市営ばんえい競馬は目覚ましい発展を遂げていくこととなります。



旭川競馬場

明治末期、旭川市近文町にて開設。昭和40年に花咲町へ、昭和50年に神居町へ移転。ばんえい競馬場としては最大の規模を誇り、大雪山系を望む眺望もファンを楽しませた。



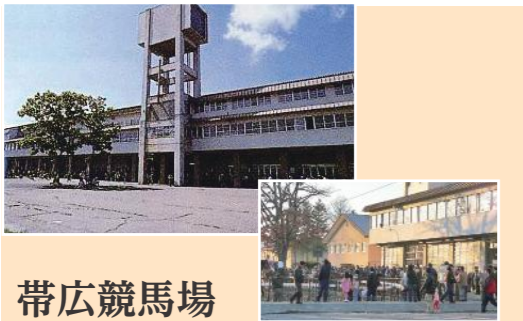
北見競馬場

市営ばんえい競馬発足当初は北見市東陵町に所在。昭和49年、若松町の丘陵に移転。4市の中で唯一、平地競馬が開催されない、ばんえい専用の競馬場だった。



岩見沢競馬場

岩見沢の競馬は明治23年に鳩ヶ丘で行われたのが最初と言われ、翌年には祭典奉納ばん馬が開催された。大正12年に利根別町駒ヶ丘に、昭和40年に岩見沢市日の出町に移転。



帯広競馬場

明治44年に開設された十勝競馬場を前身とし、昭和7年に現在地に移転。老朽化のため、昭和49年に大改修が行われた。4市のうち唯一、市の中心地に所在。



旭川競馬場で砂塵を巻き上げて接戦を繰り広げる人馬。(写真/中西関松)